

すべての障害者の権利確立に向けて

～ 第6回DPI(障害者インターナショナル)世界会議札幌大会～



2002年第6回DPI
世界会議札幌大会
組織委員会 事務局長

西村 正樹

① 世界から札幌へ

2002年10月15日、北海道札幌市の道立総合体育センター「きたえる」は4000人以上の人の熱気であふれていた。第6回DPI世界会議札幌大会の開幕の日である。「障害者の国連」とも言われるDPIの世界会議はどういうものだったのか。

DPIは、障害の種別を超え、「すべての障害者の社会への完全参加と平等」、障害をとりまく問題には当事者自身が「われら自身の声」を掲げ、1981年に創設された国際非政府組織（NGO）である。本部はカナダにあり、現在世界120カ国以上に国内組織をもつ。国連経済社会理事会では特別諮問資格、世界保健機構（WHO）の諮問資格などを有し、国際社会で活発に活動している。

DPIは4年に一度、世界会議を開催しており、今回の札幌大会で6回目を迎えた。世界会議は、世界中の障害を持つ仲間が一同に会し、交流し、世界の情報を収集、交換、学習し、今後のDPI運動の方針を論議する場である。また、世界会議の前後にDPI世界評議会を開き、具体的な活動内容を決定する。

世界会議の札幌誘致が決まったメキシコ大会から4年。全体会や分科会といった会議の中身づくりや海外参加者の受け入れのほか、世界会議札幌大会の開催を機に、DPI運動を全国で展開するために2県を除くすべての都道府県で講演会や集会を開いた。また、会議場・移動体制の整備なども行ってきた。

② Freedom from Barriers : Celebrating Diversity and Rights !

「すべての障壁を取り除き、違いと権利を祝おう。これは札幌大会のテーマであるが、ここには社会への完全参加と平等を権利として確立し、ありのままの自分で生きる、というDPIの考え方が凝縮されている。

札幌大会は当初、100カ国、2000人（国内1200人、海外800人）の参加を目標としていたが、実際の参加者は初日だけの参加者を含め3113人（国内46都道府県2272人、海外109の国と地域841人）であった。ほかにボランティアが延べ人数で3300人。大変な熱気であふれる中、開会式はDPI日本

会議議長山田昭義のあいさつから始まった。山田議長はあいさつの中で、障害者の権利の確立の必要性とともに、平和の尊さを世界の指導者に訴えた。これは、DPIが障害者福祉だけでなく、社会全般の問題に関与していく姿勢を強調するものである。続いて世界議長（今は前議長）であったジョシュア・マリング氏は「世界の障害者の80%は発展途上国にあり、障害者を貧困や差別から開放する闘いは始まったばかりである」という強烈なメッセージを送り、感動を誘っていた。

基調講演へとプログラムは移った。演者は前米国教育省次官で現在世界銀行の障害問題顧問を務めているジューディ・ヒューマン氏である。講演に入る前に、この会議の直前にお亡くなりになったDPIの生みの父であり、今回の札幌大会を誘致するきっかけをつくったヘンリー・エンズ氏をはじめとする世界的な障害者運動のリーダー3名の方たちへの黙とうを行った。これらの方々が世界中の障害者に与えてきた影響の大きさは計り知れない。

基調講演の内容は、世界40カ国以上で障害者差別禁止法がある、協力して何が問題か訴えていく力をつけよう、4年後の次の世界会議に向けて具体的な目標を持ち、どういふビジョンを持って活動していくかが大切である、ということであった。

午後は障害者の権利条約をテーマにシンポジウムが開かれ、条約のあり方や必要性などを歴代の世界議長や国連関係者が論議した。ここでDPI創設メンバーの1人であり、元スウェーデン社会大臣で現国連社会開発委員会の特別報告者であるベンクト・リンクビスト氏は、人権モデルと社会開発モデルの長所を取り入れつつ、新条約は既存の人権条約などと並行して利用され、障害当事者参画のもとでつくられるべきだと強調している。

③ 「分科会」及び「小グループによる自由討議」

分科会は2日間にわたり15テーマ、40こま設定された。DPIの世界会議はいわゆる福祉の集会ではなく、社会全般を討議する場であるということ、また、世界各地域の活動などを取り上げることなどから、様々な種類の分科会が設けられている。「自立生活」や「アクセス」などから、「条約」や「女性障害者」「生命倫理」など、最近特に関心が



写真 - 1 熱心に聞きいる参加者

高まっているもののほかに、「アジア太平洋障害者の十年」や「人権」、「障害種別や社会状況を乗り越えた連帯」や「開発」などである。ここでは主な分科会について報告する。

「条約」の分科会も多くの人が集まったが、ここでは障害者権利条約の条文にどのような内容を盛り込むかということがまず話し合われた。何が権利であるかということは、障害当事者自ら声を上げていくことが大切であり、そうした声をまず自国に帰ってから上げていく、上げる力をつけることが大切であるということが議論された。特に途上国の参加者からは権利条約に関する情報不足の指摘があった。また、権利条約を実現するために立場を超えて障害関係団体が力を合わせる必要がある、との意見が出された。特に世界盲人連合(WBU)の会長で国際障害同盟(IDA)の議長を務めるキキ・ノルドストーム氏などから、DPIを含め7団体で構成する国際障害同盟の協力体制を確固にすること、その前提として自国内の活動において、様々な団体と協力体制を作り上げる必要性が指摘された。

「生命倫理」分科会は、立ち見も出るほど。グレゴ・ウォルブリング氏は、「ユネスコの世界人権宣言の第6条で、何人も遺伝子をベースに差別されてはならない、と明記されている。実際には出産における性の選択は禁止されているが、障害を対象にした胎児の選択がされるのは差別である」と述べた。安積遊歩氏は、「出生前診断や遺伝子操作で人間の命を操作できる大変な時代になっていることを日本のみなさんに認識してほしい。お腹のなかから障害者が差別されている」と、自分の体験を話した。

また、「ゲノムの研究で遺伝子情報が収集できるようになり、遺伝病の素因をもった人が雇用されない。アメリカ障害者法は障害者の雇用差別解消に役立っていない」との問題提起もあった。最後に(1)違うことの権利がある(2)自分の子どもを設計する権利はだれにもない(3)人間(person)の概念は能力をベースに決めるべきでない、ということはこの分科会のまとめにしている。

当然すべての分科会をここで報告することではできないが、障害者運動の世界的なリーダーたちの話を直接聞いて、意見の交換ができたというのは、参加者にとって大きな収穫だったに違いない。

分科会のほか、大会期間中はポスター展示やビデオ上映のブースも設けられた。ビデオ上映では、警察と激しく衝突しながらアクセス運動(バリアフリー運動)を展開している韓国からのビデオが大きな反響を呼んでいた。

④ 次は南アフリカで

大会最終日は午前中に、DPI世界会議(世界組織)新役員の選出などがあり、新世界議長にフィリピン人のビーナス・イラガン氏が選ばれた。初の女性議長誕生だ。発展途上国出身でもあり、障害者の草の根運動の結集軸たるDPIらしい。権利条約、

アフリカ障害者の十年、アジア・太平洋障害者の新十年など課題は多いが、新役員に大いに期待したい。

午後は閉会式。エソツップ南アフリカ大統領府担当大臣やビーナス新議長のあいさつがあり、4日間にわたる世界会議札幌大会は幕を閉じたのである。

また、翌日の世界評議会で、次回の世界会議の開催国が南アフリカ共和国に決まった。世界会議をアフリカで開催するのは初めてとなるが、アフリカでは今、国連の「アフリカ障害者の十年」が進められていることもあって、世界会議のアフリカ開催は非常に意義深いものとなるであろう。

⑤ 障害者の権利の確立に向けて～札幌から世界へ～

DPI世界会議札幌大会はこうして無事に終わった。今大会は、内容もさることながら、情報保障の面でも高い評価をいただいている。会議では英語、フランス語、スペイン語のDPI公用語と開催国の日本語のほか、韓国語と中国語の通訳も用意した。聴覚障害者には、日本手話、アメリカ手話、日本語と英語の音声文字化システム活用、英語キャプションサービス、日本語の要約筆記といった複数の方法によって情報を提供した。視覚障害者には日、英、仏、西の点字資料のほか、CD-ROMによる要約集も用意した。語学ボランティアも上記言語のほか、ロシア語やモンゴル語などにも対応できる体制をとった。

また、北海道及び札幌市の全面的な協力がなければ、ここまでスムーズな大会運営はできなかったであろう。細かな反省点はもちろんたくさんあるが、参加者の反応も非常によく、大会自体は成功と言えるのではないだろうか。

しかし、マリノガ前世界議長が開会式のあいさつの中で、「障害者の社会への完全参加と平等への闘いは始まったばかりである。世界に6億人いると言われている障害者の80%は途上国に住んでいる。途上国では障害者は死を意味することもある」と言っていたように、そこでは障害者は恒常的な権利侵害状況に置かれているといっても過言ではない。また、先進国でも、障害者が地域社会の中で生き生きと暮らしているとは言えない。

こうした状況を打破するためにすべきことは多い。その一つとして、国内的には「障害者差別禁止法」制定に、国際的には「障害者権利条約」の動きに主体的に関わることが挙げられる。特に、何が権利かということ、障害を持つ当事者が提起することが必要であり、そのために障害者自身、エンパワーメント(力をつけること)をしなければならない。DPIの役割とは正にこうした当事者のエンパワーメントであり、種別を超えたすべての障害当事者の声を具体的な権利として確立していくことである。

私たちは、DPI世界会議札幌大会を、あらゆる障害者をすべての障壁から解放する大きな一歩にしなければならないのである。



写真 - 2 DPI世界議長
ビーナス・イラガン



写真 - 3 歓迎レセプションでの様子